

# 中堅レベルの教師がもつ関心の形成過程に関する研究 —体育授業において恒常に学習成果を高めることができる教師への 熟達化過程について—

A study on the development of curiosity among proficient career teachers

- The process of expertise toward teachers who consistently achieve learning outcomes  
in physical education classes -

厚東 芳樹

大妻女子大学家政学部

Yoshiki KOTO

Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：中堅レベルの教師、関心、熟達化過程

Key Words : Proficient career teacher, Curiosity, The process of expertise

## 抄録

本研究の目的は、中堅レベルの教師を対象に、ナラティブ・インタビュー法を用いて教師生活の中でどのように「関心」を形成してきたのか調査し、体育授業において恒常に学習成果を高めることができる教師への熟達化のひとつの道程を構造化することで、優れた教師と同じ関心を形成することの実現可能性を探ることとした。調査の結果、(1)「体育科教育学分野の科学知を知る」をはじめとする4つを関心の具体的な行動目標として形成していたこと、(2)「マネジメントを少なくし、運動従事量が多くなるための場づくりの工夫できる力量形成」、「動作学や解剖学などの知識から言語的相互作用を実践できる力量形成」、「子ども一人ひとりを取りつづ、子どもの個性に合わせた授業の場づくりと年間スケジュールの工夫ができる力量形成」の順に努力を積み重ねていたこと、(3) A教師の成長過程と4つの関心の形成とが対応していたこと、が認められた。とりわけ、上記(2)よりA教師がそれぞれの時代で努力を積み重ねてきた行為は特殊な才能や経験ではなく、誰もが再現可能な内容であるものと考えられる。このとき、教師一人ひとりのもつ特殊性に合わせた助言ができるメンターの存在が重要であるものと考えられた。

いずれにしても、上述した道程を踏まえながらA教師が積み重ねた努力の内容を真似すれば、優れた教師と同じ関心を形成することを実現できる可能性はあるものと考えられた。

## 1. はじめに

わが国では、教師の実践的指導力は教師自身に帰属しており、それを向上させるのは教師自身であると言われている<sup>[1]</sup>。多様なキャリア発達の様相にある教師の場合、経験から学び成長する主体とみなされるのである<sup>[2]</sup>。したがって、それぞれの教師や研究者が成長の方向を定め、その過程を明らかにしていくことが求められている<sup>[3]</sup>。しかしながら、これまでの教師教育分野の研究では熟達

化への段階の数が異なっていたり<sup>[4][5]</sup>、「優れた教師」を物理的な経験年数の長さで捉えてきた<sup>(注1)</sup>ものもあり、未だ、優れた教師になるための成長過程はほとんど明らかになっていない。

筆者は先に、優れた教師を態度得点の高い教師と捉え、上記の教師への熟達化の過程を明らかにしていく目的から、教師の関心と授業中の「出来事の予兆」への気づきとの関係を検討してきた。その結果、(1) 学習成果(態度得点、ゲームパフォ

ーマンスなど)を高める教師はそうでない教師に比して授業中の「出来事の予兆」への気づきが多くなること、気づきの多くが「技術的つまずき」を防止する内容であったこと、「出来事の予兆」への気づきに対する手立てとして「心情的推論」「合理的推論」「文脈的推論」という3つを中心に推論し、「目的志向的対処」を実施する特徴があったこと<sup>[6][7][8][9]</sup>、(2) 恒常に学習成果(態度得点)を高めることができる教師(中堅レベルの教師)の事例より、教師のもつ関心から授業中の「出来事の予兆」への気づきや「推論一対処」が行われている可能性の高いこと、恒常に態度得点を高めることができる教師への熟達化の過程として、「体育科教育学分野の科学知を知ること」で授業の基礎を知ること→「人間らしさ(動物学・解剖学など)や教材の歴史を知ること」や「専門家たちとコミュニケーションをとること」で教材研究を深めること、→「子どもを観察する癖を身につけることで子ども一人ひとりにあったコーチングが展開できること」が、ひとつの道程として考えられたことを報告してきた<sup>[10]</sup>。

一方、中堅レベル以上の教師はどのような熟達化過程を歩み「出来事の予兆」への気づきと結びつく関心を形成してきたのか調査が不十分なため<sup>[10]</sup>、優れた教師と同じ関心を形成することは実現可能なのか、仮に実現できた場合は学習成果を高める「出来事の予兆」への気づきや「推論一対処」の展開が可能な教師へと成長することも再現性があるのかは、未だ、明確にはなっていない。

本研究の目的は、恒常に態度得点を高める中堅レベルの教師を対象に、ナラティブ・インタビュー法を用いて教師生活の中でどのように「関心」を形成してきたのか調査し、恒常に態度得点を高めることができる教師への熟達化のひとつの道程を構造化することで、優れた教師と同じ関心を形成することの実現可能性を探ることとした。

## 2. 研究方法

### 2.1. 調査対象者

調査対象者を選定する際、学習成果(子どもの授業評価など)を高める教師への熟達化の過程の一端を導出する目的から、子どもからの授業評価法のひとつである「態度測定法」を用いた自己分析を継続的に行っており、上記の測定法で優れた成果を生み出している者とした。すなわち、「5年

以上、態度測定法による体育授業の自己分析を行っている者」「態度測定の診断結果が常に高いレベルになる者」の2つの条件を満たした教職経験年数16年目のA教師(2年生担当)とした。

研究課題の実施にあたっては、事前に研究の主旨及び目的と調査方法を説明して実施した。このとき、調査対象としたA教師および学校長より調査の同意を得て行った。

### 2.2. 授業評価の方法

体育授業の評価は、態度測定法を用いて行った。この測定道具は、学習成果を測定する総括評価の一つとして有効であることが認められた体育授業診断法である。とりわけ、運動技術を機械的・生産的に高めた場合であっても態度得点が高まるとは限らず、両者を同時に高める能動的な学習が必要であることが指摘されている<sup>[11]</sup>。これまで著者は、態度測定法によって算出される態度得点の高い教師を優れた教師と捉え、研究調査を行ってきた。本研究でも、態度得点の高い教師を優れた教師と捉え検討した理由はここにある。

今年度、A教師が2年生担当であったため、態度測定法による子どもの体育授業に対する愛好的態度は、梅野・辻野<sup>[12]</sup>の作成した小学校2学年用の態度尺度を用いて2025年7月末に測定した。

### 2.3. 教師のもつ「関心」の記録

A教師のもつ「関心」は、「5マス関心調査票<sup>[13]</sup>」を用いて導出した。その結果、「身体を自由自在にコントロールできる身体技能の獲得と子どもが楽しいと言ってくれる体育授業」を中心、「体育科教育学分野の科学知を知る」「人間らしさ(動物学・解剖学を学ぶ)を知る」「専門家たちとコミュニケーションをとる」「子どもを観察する癖を身につける」の4つを関心の具体的な行動目標として記述していた。また、4つの行動目標に対して、それぞれ4つの行動計画が認められた(図1参照)。

### 2.4. ライフヒストリーの導出方法

優れた指導者などのライフヒストリーは、これまで質的研究法によって導出が試みられてきた研究が散見できた。田代・會田<sup>[5]</sup>は、質的研究の利点として「調査された人々の考え方や体験、またその行動の背景にある論理を全体的に『理解』し、テクストなどの質的データに根ざした形で新しい概念

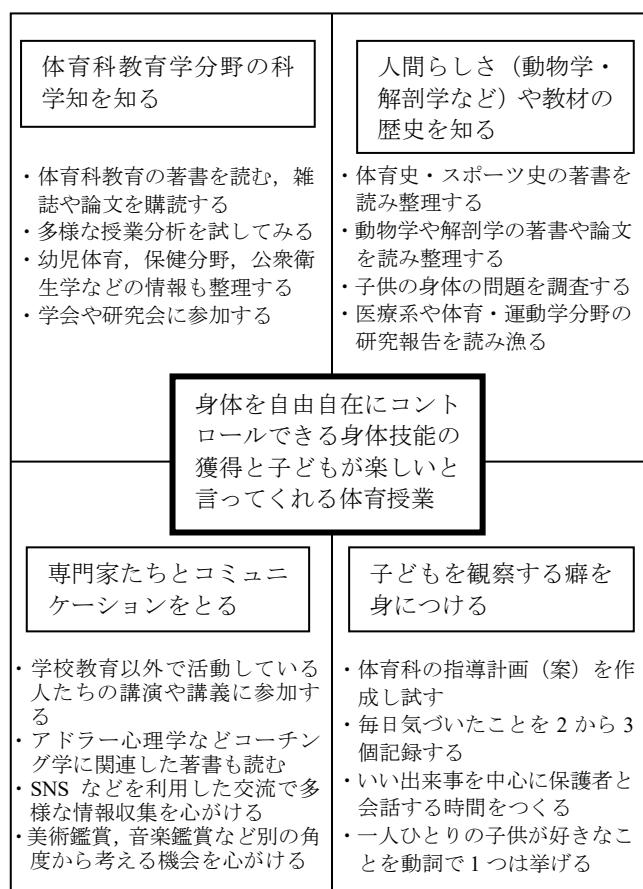


図 1. A 教師が描いた「関心」調査票の結果

や理論を『発見』できる点にある<sup>[14]</sup>と述べている。その中でもライフヒストリーの導出は、優れた実践者の経験を科学知として表現できると言わっている<sup>[15][16][17]</sup>。

本調査は、優れた実践者のライフヒストリー導出を試みた先行研究<sup>[5][18][19][20]</sup>に倣って実施した。すなわち、(1) A 教師には、これまでの教師生活を振り返りながら教師人生史の内容を記述してもらった(ナラティブ・インタビュー<sup>(注2)</sup>補助資料の作成)。(2) 作成してもらった補助資料を基に、ナラティブ・インタビュー調査<sup>[21]</sup>を実施し、発言内容はその場でメモを取り、できるだけ素早く語順通りに再構成した。(3) 上記(1)(2)で得られた結果よりナラティブ分析を行い、ライフヒストリー<sup>(注3)</sup>の構造図を作成した(図 2 参照)。

ナラティブ・インタビュー調査では、「出身、教職に就いた経緯、目的や期待」「今、関心を抱いていることとその理由、今の関心を有した時期、過去の出来事」「授業実践で重要なこと」の3つの質問を最初に示し、語りの展開は語り手に一任して

いた先行研究<sup>[20]</sup>の形を採用した。

このとき、すべての会話を録音したわけではない。なぜなら、ナラティブ・インタビューを実施する際の問題として、質問が通常のインタビュー状況と混乱され、自由度の高い「日常的な語り」が得られない可能性が挙げられている<sup>[21]</sup>。そのため、調査対象者には教材研究の制作作業と一緒にしながら、教職経験年数1, 2年目の初任教師への放課後の指導・助言を行っている場面の中で、あるいは食事をしながら自然な雰囲気の中で語ってもらったため、インフォーマルな会話を全て録音することは不可能だった。調査期間は、2024年3月から2025年9月にかけて計5回、1回40~60分程度、飲食店や学校の会議室などを借用しながら実施した<sup>(注4)</sup>。

なお、ナラティブ法など質的研究法は、統計的なエビデンスの担保が難しく、一般化できない、もしくは客観的ではないという批判がある<sup>[21]</sup>。これについて、ライフヒストリー研究はエビデンスが保証される量的研究や科学知を組み合わせることによって、説得力のある解釈を生み出すことを目指したものとなっている。本研究の場合、調査対象者の単なる語りを整理しテキスト作成したライフヒストリーに留まるのではなく、態度測定法を用いた授業研究小史より、「初任レベル」「新人レベル」「一人前レベル(態度得点を高めることができる教師)」それぞれの段階と A 教師の語りを照合させること、各レベルでの態度得点の結果からみる A 教師の授業の特徴および各レベルの教師の授業の特徴を押さえ検討することで、説得力ある解釈の創出を試みた。

## 2.5. ライフヒストリーの分析方法

インタビューによって導出したライフヒストリーは、次のように分析した。すなわち、ナラティブ

表 1. Cortazzi の提示したナラティブ構造

構造	内容
Abstract 要約	物語の概要や導入部
Orientation 状況設定	登場人物、時間、場所などの背景情報
Complicating Action 出来事	物語の中心となる出来事や問題
Evaluation 評価	語り手の感情や出来事の意味づけ
Resolution 解決	問題の解決や結果
Coda 終結	物語の締めくくり(現在とのつながり)

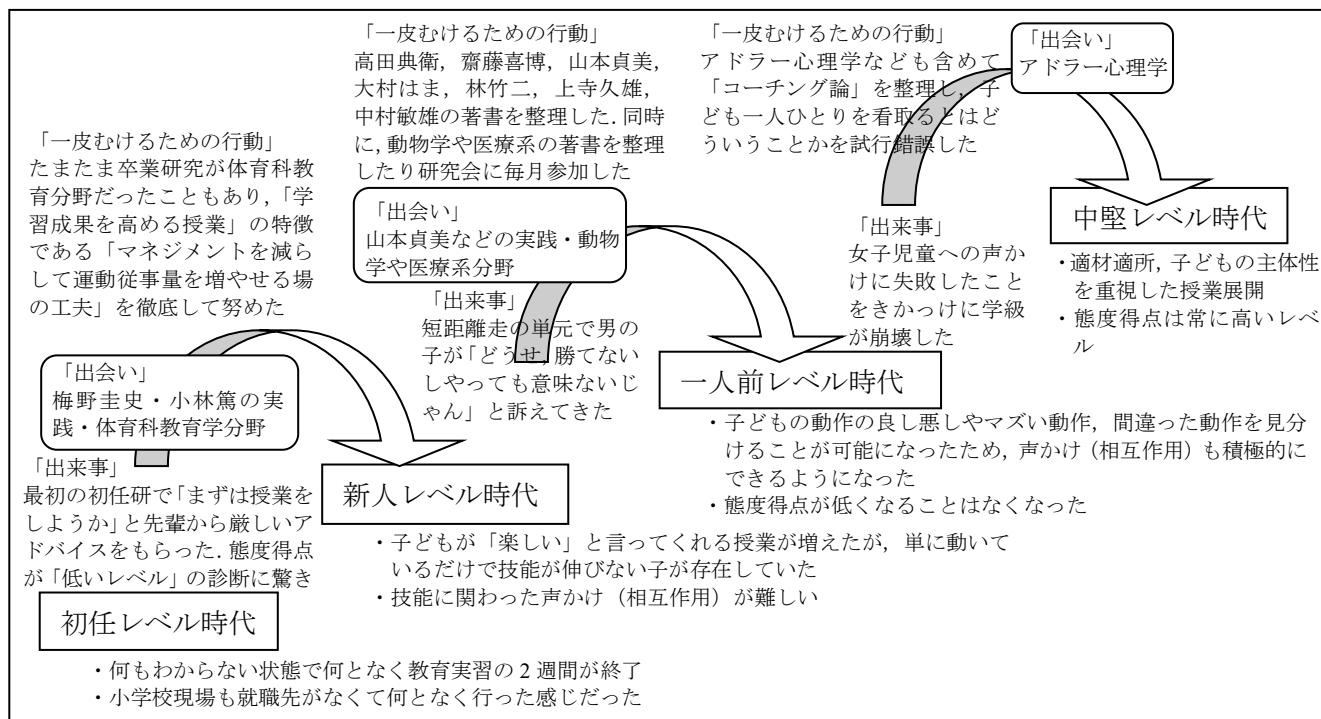


図2. A教師のライフヒストリーの構造

を体系化する最も基本的なアプローチと言われている Cortazzi<sup>[22]</sup>の枠組みを用いてナラティブの構造化（表1参照）を試みることで、「ナラティブが構造化されているかをつかむことができ、語りの役割を深く検討することができる<sup>[19]</sup>」方法で実施した。具体的には、「初任時代」「新人時代」「一人前時代」「中堅時代（現在）」の4段階それぞれで、いかにストーリーが体系化され、どのように展開され、どこで、どうやって始まり終わったのかを導出しながら構造化し、語り者の機能や役割の検討を試みた<sup>（注5）</sup>。

なお、一人前レベル以上はどの分野でも2割程度存在するという先行研究<sup>[23]</sup>の主張と学習成果（態度得点）が高い教師が各学校に2名程度存在すること<sup>[13]</sup>から、「一人前レベル」を態度得点が高いレベル（常に高いレベルではない）と設定した。

また、恒常に学習成果（態度得点）を高めることができるレベルを「中堅レベル」、態度得点が普通レベルや低いレベルなど疎らな段階を「新人レベル」、それ以前に何も認知していない状態を「初任者レベル」と設定した。

その他、各レベルの教師の授業の特徴を押さえる際、各教師を対象に継続したデータ収集までは今回実施できなかった。それ故、「一人前レベル」以上の教師の特徴は検討できなかった。

### 3. 結果と考察

#### 3.1. 態度測定の診断結果

表2は、全単元終了後に実施した態度測定法によって算出した態度項目毎の得点および判定結果を示している。

中堅レベルのA教師の体育授業に対する態度得点の診断結果は、男女共に「高いレベル」の範疇にあった。これより、A教師のライフヒストリーを導出することは、学習成果（子どもの授業評価など）を高める教師への熟達化の過程の一端を導出する方法として妥当であるものと判断した。

#### 3.2. A教師のライフヒストリー

##### 3.2.1. 初任時代

教育実習など「初任時代」の頃は、何も考えずに日々が過ぎていたという。

「教育実習は、中学校免許取得が主であったこともあり、2週間の小学校の教育実習はわからないうちに始まり気づいたら終わっていたという感じでした。記憶しているのは、5年生に配属され、体育授業の『ドッヂボール』教材で研究授業を発表したときの検討会ですね。別の学年の教員から、『ドッヂボールは5年生の単元で取り扱わないのではないのか。学習指導要領にも書かれていっていないはずですよ』という質問に対して、担

表2. 体育授業診断法による診断結果（中堅時代）

K 小学校 2 年生		女子 14 名		男子 15 名	
		授業後		授業後	
よ ろ こ び	1 体育をする喜び	0.79	○	0.87	○
	2 はりきる気持ち	0.79	○	0.87	○
	3 運動のそう快さ	0.64		0.87	○
	4 深い感動	0.64		0.73	
	5 がんばる習慣	0.93	○	0.93	○
	6 学習の喜び	0.79		0.80	
	7 挑戦する態度	0.79		0.87	
	8 体育科目の価値	0.86	○	0.87	○
	態度スコア	6.21	B	6.80	B
評 価	9 仲間との協力	0.86	○	0.87	○
	10 授業のながれ	0.86	○	0.80	○
	11 体力づくり	0.86	○	0.87	○
	12 授業の印象	0.79		1.00	○
	13 男女意識	0.93	○	0.93	○
	14 みんなの喜び	0.86	○	0.73	○
	15 体育授業に対する好嫌	0.71		0.87	○
	16 体育授業に対する評価	0.93	○	0.87	○
	態度スコア	6.79	B	6.93	B

任の教員が『確かにそうかもしませんが、子ども達のあの姿や会話で十分ではないでしょうか』というやり取りに対して、『え、ドッヂボールって5年生ではやらないんだ。学習指導要領ってなんだろう』と率直に思ったのは覚えていました。今考えると、とても恥ずかしい状況ですよね』

上記の発言から教育実習の時点では、恐らく他の教育実習生よりも教師という仕事に信念を持って向き合っていなかった様子が伺える。

このような状態の中、たまたま卒業研究で「体育科の授業研究」に関する内容を取り扱う機会があり、「態度測定」「教師行動観察法」「ALT-PE法」などを先行研究から学ぶ経験があったという。

「体育科教育学を学ぶ中で、何となく、いい授業というのは教師側、保護者など他者側以上に、子ども側から評価される授業こそいい授業であるという考え方というか信念の基盤が、今思えばできたのかなって思います。ただ、あくまでも卒業するための卒業研究だったので、そこまでいい授業とは何かは意識していなかった。」

その後、卒業し就職が決まっていなかったため、地元の小学校教育現場に行くことを決めたという。そこでの出来事が、教員人生の中のひとつの大きな出来事であったと振り返っていた。

表3. 体育授業診断法による診断結果（初任時代）

O 小学校 2 年生		女子 18 名		男子 17 名	
		授業後		授業後	
よ ろ こ び	1 体育をする喜び	0.33	×	0.41	×
	2 はりきる気持ち	0.39	×	0.59	
	3 運動のそう快さ	0.17	×	0.35	×
	4 深い感動	0.17	×	0.35	×
	5 がんばる習慣	0.44	×	0.76	○
	6 学習の喜び	0.11	×	0.59	×
	7 挑戦する態度	0.44	×	0.71	
	8 体育科目の価値	0.28	×	0.24	×
	態度スコア	2.33	E	4.00	D
評 価	9 仲間との協力	0.28	○	0.41	○
	10 授業のながれ	0.22	○	0.12	○
	11 体力づくり	0.50	○	0.41	○
	12 授業の印象	0.17		0.29	○
	13 男女意識	0.28	○	0.24	○
	14 みんなの喜び	-0.11	○	0.29	○
	15 体育授業に対する好嫌	0.22		0.24	○
	16 体育授業に対する評価	-0.11	○	0.18	○
	態度スコア	1.44	E	2.18	D

「小学校教員1年目に初任者、転任者が授業公開する機会があつて、私は体育授業『ならびっこ キックベースボール』ってのを公開したんですが、そのときの経験は強烈でしたよ。公開した放課後に検討会が実施されなくて、なんとなく職員室にいづらい雰囲気でした。授業中の先輩教師達のムッとした雰囲気や気まずそうな表情は、今でも忘れません。きっと、駄目なんだろうなって心の中で思いつつ、1年生の担任の先生に何かありませんか?って聞いたんだけど、『じゃあ一言だけ、まずは授業しようか。あと、2年生の子どもが授業中に話かけてきたとき、立って話を聞く、目を合わせないってのはダメだよ』と先輩から厳しいアドバイスをもらったのは覚えています」

そこから卒業研究の内容を改めて思い出し、子どもがいいという授業をしてみようと決心、まずは態度測定を実施してみたという。その結果、態度得点が男女共に「低いレベル」の診断に驚き(表3参照)、ますますこのままでは専門職の教師としてダメだと思い直し、授業づくりを考えるようになったと述べていた。

「態度測定法に関する梅野圭史先生、小林篤先生の著書や論文を読み、教師行動など授業分析の結果を整理し、マネジメントを少なくし、運

動従事量が多くなるための場づくりの工夫をとにかく徹底してやるように努めました。自らの授業を固定カメラで撮影し、マネジメント時間と運動従事量の時間を測定したり、子どもが生き生きしている先輩の先生の授業を見せてもらって、マネジメントを減らすための学習規律の工夫を学んすぐに真似をしたりしましたよね。とくに、小林篤先生の著書は本当に毎日のように目を通して読み返して、月1回授業を測定して授業づくりを考えてましたよね」

態度測定の診断結果から、A教師の「初任時代」の授業の様子を推定すると、男女共に11番「体力づくり」の得点は高いものの、「評価」尺度の「授業のながれ」「授業の印象」「みんなの喜び」「体育授業に対する好嫌」「体育授業に対する評価」はいずれも0.2点台以下であった。このことは、(1)1960年代にしばしば見られた「体力づくり中心」の体育授業になっていたこと、(2)「無駄のない授業」

「練習活動を工夫した授業」「学習集団を組織するもしくは子どものペースに合わせた授業」が成立しておらず<sup>[24]</sup>、「この授業はいい授業ではない、なぜなら楽しくないからだ。故にいい授業ではない」と子どもが評価していた<sup>[13]</sup>こと、(3)とりわけ、男子や体力のある女子以外からはきわめて評価の低い授業になっていたこと、を示唆している<sup>(注6)</sup>。

これらより、初任時代のA教師は、「研究授業の公開での失敗」という出来事をきっかけに「マネジメントを少なくし、運動従事量が多くなるための場づくりの工夫できる力量形成」の努力を積み重ね、新人レベルへと一皮むけたものと考えられた。A教師が有していた「体育科教育学分野の科学知を知る」という関心の行動目標は、この時代に形成されたものと考えられる。

### 3.2.2. 新人時代

努力して、授業の場づくりの工夫は考えて組み立てることができるようになり、子どもが「楽しい」と言ってくれる授業が増えてきたという。

「よく、高校生の兄弟が小学生の弟の勉強を教える方が小学校教師よりも面白いといっていますが、素人でもできる内容は授業ではないと思います。そういう意味で、マネジメントの工夫などを考えて授業が組み立てられるようになってきたので、教育のプロの入り口に立てたのかなという自負はでてきました」

表4. 体育授業診断法による診断結果(新人時代)

K 小学校 5年生		女子 11名	男子 13名
		授業後	授業後
よろこび	1 こころよい興奮	0.45	0.54
	2 心身の興奮をほぐす	0.36	×
	3 生活のうるおい	0.27	×
	4 苦しみより喜び	-0.45	×
	5 集団生活の楽しみ	0.64	0.69
	6 友だちを作る場	0.55	○
	7 積極的活動意欲	-0.18	×
	8 自主的思考と活動	0.00	×
	9 体育科目の価値	-0.18	×
	10 授業時間数	0.27	0.69
態度スコア		1.73	E 4.46 C
評価	11 キビキビした動き	0.82	○
	12 体力つくり	0.64	×
	13 明朗活発な性格	0.36	0.38
	14 精神力の養成	0.82	○ 0.69 ○
	15 堂々がんばる習慣	0.91	○ 0.46
	16 協力の習慣	0.73	○ 0.69 ○
	17 基本的理論の学習	0.91	○ 0.77 ○
	18 深い感動	0.55	○ 0.46 ○
	19 授業のまとまり	0.73	○ 0.69 ○
	20 授業の印象	0.82	○ 0.46
態度スコア		7.27	A 5.92 B
価値	21 チームワークの発展	0.36	×
	22 みんなの活動	0.09	-0.08
	23 みんなのよろこび	0.18	0.00
	24 利己主義の抑制	0.09	-0.08
	25 永続的な仲間	0.55	0.31
	26 主体的人間の育成	0.18	×
	27 理論と実践の統一	0.82	○ 0.54 ○
	28 授業のねらい	0.55	0.31
	29 教師の存在価値	0.36	0.15
	30 体育科目の必要性	0.64	0.38
態度スコア		3.82	C 1.69 D

また、態度測定でも男女共に「低いレベル」と診断されることはなくなったという(表4参照)。これらより、新人レベルに到達した様子にあった。

一方、「新人レベル」に突入してからは、「未だ、態度測定で『普通レベル』以上の結果がでない」「運動従事量は担保できるようになったが、単に動いているだけで技能が伸びない子が存在することに対応できない」という実践命題を抱えていた。とりわけ、技能に関わった声かけ(言語的相互作用)が難しく、いい動作とマズい動作・間違った動作の違いを見分けることができないという悩みが

あったという。

「ちょうど、放課後に学校の校庭で陸上教室を毎週のように実施されてて、しかもちょっと有名な指導者の方々だったみたいで、せっかくなので見学したいと思ってみせてもらったんですが、そこでの指導が理解できなくて、陸上ってやったことなかったから、何が正解か、何でこの練習をするのか、まったくわからなかつた。そんな中で、コーチの人が『今の音、いいよ』『今の足の切り替え、遅い』とか声かけるのを聞いて、まったくわからないなってのは覚えています。また、体育授業の中で外部指導者による体操教室ってのを実施する機会があつて、体操の専門家の方の後転の指導を見せてもらえたんですが、段階を追つて一つひとつの動作を順番にやっていく。そうすると、全員ができたんですよね。本当にわかりやすくて、教える人でこんなに変わるんだって感じたのと、体育科教育学を中途半端に勉強した分、ちょっと教師という専門家を気取った自分もいたんですよね。」

上述した経験から、いい動作とマズい動作・間違った動作の違いを見分けて、技能に関わった声かけ（言語的相互作用）ができるようになることを目指し始めていたことがわかつた。こうした中、次のような出来事があったと語っていた。

「4年生の体育授業の中で、運動会前ってのもあつたので短距離走の単元をやってたんですが、その中である男子児童が『どうせ勝てないし、順位わかるからやっても意味ないじゃん。だから、走りたくない』って訴えてきたことがあつて。そのときは『何が起こるかわからないから、頑張って走ろうよ』って促して走つたんですが、その後、短距離走からリレーをするよって全体に伝えたとき、他の児童達から『○○君と同じチームは負けるから嫌です』『○○君と走りたい』って声があがってきて。これは、お互にとっても良くないなって思ったんですよね。」

確かに、態度測定の診断結果をみてみても、「評価」尺度の態度スコアは高いものの、「よろこび」「価値」の2尺度のそれは低い傾向にあつた。これより、「この授業はいい授業だとは評価する。ただ、楽しくないから価値も感じない、結果的にいい授業だとは評価できない」と子どもがアンバランスな授業と評価しているものと考えられる<sup>[13]</sup>。とりわけ、女子は「楽しいー楽しくない」を反映し

ている「よろこび」尺度、男子は「体育科は価値があるーない」を反映している「価値」尺度の態度スコアが、それぞれ低い傾向にあつた。

各項目の得点をみてみると、「マネジメントを少なくし、運動従事量が多くなるための場づくりの工夫」と関係する「友だちを作る場」「キビキビした動き」「協力の習慣」「授業のまとまり」の4項目の得点は高い傾向にあつた。一方、「苦しみより喜び」「精神力の養成」の2項目の得点が高いのに對して「積極的活動意欲」「自主的思考と活動」「みんなの活動」「みんなのよろこび」などの得点は低い傾向にあつた。このことは、運動技能の高い子どもや体育が得意な子どもを中心とした授業展開になつており、それ以外の子どもは主体的に取り組めない体育授業が実践されていた可能性は推定できる。その結果、上述した事例のような子どもが生まれてしまったのではないだろうか。

いずれにしても、上述した出来事が生起したとき、子どもの責任ではなく、運動技術を指導できていない授業、「上手いー下手」「できるーできない」を基準とした授業を展開していた自らの力量不足を深く反省したとA教師は語っていた。そこでA教師は、8秒間走で著名な山本貞美の存在を思い出し、改めて山本貞美、高田典衛、齋藤喜博の著書を読み漁り内容を整理していったという。

整理する中で、卓越した実践者として名前が全國的に知られている教師は、共通して「動物学や医療系の分野」に精通していることに気づき、まずは動物学分野の著書17冊を読み漁り、「人間とは何か」「他の動物と何が違うのか」「直立二足歩行、合理的で効率のいい動作」「学習と遺伝の違い」などを整理する作業を8カ月かけて行ったという（図3参照）。

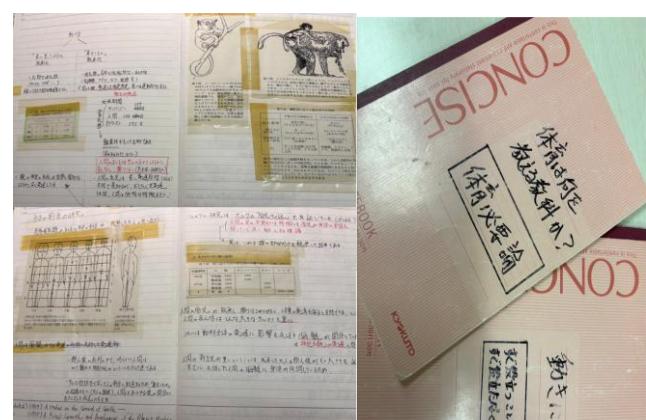


図3. 新人時代にA教師が整理したノート

併せて、学校現場の近くの整形外科医院で整形外科医、理学療法士、作業療法士達が月1回開催している研究会に毎月参加して学ぶ活動も転勤するまでの3年間は欠かさず継続してきたという。

これらより、新人時代のA教師は「運動を知らないで体育授業を教える教師を子どもから突き付けられた失敗」という出来事をきっかけに「動作学や解剖学などの知識から言語的相互作用を実践できる力量形成」の努力を積み重ね、一人前レベルへと一皮むけたものと考えられた。A教師が有していた「人間らしさ(動物学・解剖学など)や教材の歴史を知る」「専門家達とコミュニケーションをとる」という関心の行動目標は、この時代に形成されたものと考えられる。

### 3.2.3. 一人前時代

動作学や解剖学などの知識を得たことで、授業展開に余裕が生まれ、授業や単元毎にミニマムを定め言語的相互作用も積極的に展開できるようになった結果、態度得点が「低いレベル」になることはなくなったという(表5参照)。

「例えば、子どもが『鉄棒なんてできなくても死なないし』ってセリフ、でもぶら下がる、掴むっていう段階を踏んでいき、指先の器用さや握力を高めていくことって、実は人間の生命力や人生使い続けることができる身体につながっているんですよ。他にも、例えば走るってよくよく考えたら教えてもらったことがありますか?走るって何となく当たり前にできると思っているけど、奥が深くて足の接地、足の切り替えのタイミングなどの技術が詰まっているんですよ。凄いのは、100m走の金メダリストを教えていた指導者って陸上経験者じゃないんですよ。だから、経験ないから教えられないってことは絶対にない。そう考えたら、知っているか知らないかの違いってことになりますよね。他にも、佐々木久吉先生の本に出会ったことがあります。彼は、サッカー教材の単元を250時間ぐらいやって、個体発生は系統発生を繰り返しているという仮説を実証していました。そこから、サッカーとかアメリカンフットボールとかバスケットの歴史を調べて整理することもやったことがあって、そうすると今の子どもの到達レベルってのが判断できるようになったんですよね。歴史を調べること、つまり教材研究の大切さっての

表5. 体育授業診断法による診断結果(一人前時代)

	K 小学校 6年生		女子12名	男子15名
			授業後	授業後
	よろこび	態度スコア	0.60	○
評価	1 こころよい興奮	0.50	0.60	○
	2 心身の興奮をほぐす	0.42	0.53	
	3 生活のうるおい	0.33	0.47	
	4 苦しみより喜び	0.17	× -0.07	×
	5 集団生活の楽しみ	0.67	0.73	
	6 友だちを作る場	0.58	○ 0.67	○
	7 積極的活動意欲	0.58	× 0.60	×
	8 自主的思考と活動	0.17	× 0.53	○
	9 体育科目的価値	0.42	0.40	
	10 授業時間数	0.75	○ 0.73	○
価値	態度スコア	4.58	C 5.20	B
	11 キビキビした動き	0.67	0.73	
	12 体力つくり	0.50	× 0.67	×
	13 明朗活発な性格	0.33	0.47	
	14 精神力の養成	0.58	0.73	○
	15 堂々がんばる習慣	0.67	0.53	
	16 協力の習慣	0.67	○ 0.73	○
	17 基本的理論の学習	0.75	○ 0.80	○
	18 深い感動	0.50	○ 0.53	○
	19 授業のまとめ	0.58	0.73	○
価値	授業の印象	0.67	○ 0.53	○
	態度スコア	5.92	B 6.47	B
	21 チームワークの発展	0.25	× 0.27	×
	22 みんなの活動	0.17	0.13	
	23 みんなのよろこび	0.17	0.13	
	24 利己主義の抑制	0.17	0.20	
	25 永続的な仲間	0.58	0.47	
	26 主体的人間の育成	0.08	× 0.13	×
	27 理論と実践の統一	0.58	○ 0.73	○
	28 授業のねらい	0.75	○ 0.40	
価値	29 教師の存在価値	0.17	× 0.33	×
	30 体育科目的必要性	0.67	○ 0.47	×
価値	態度スコア	3.58	C 3.27	C

が本当にわかりましたし、誰に何を聞かれてもそこら辺の教師よりは語れるかなって自信もついてきた。教育のプロになれたなという自負はでてきましたよね」

このことからも、A教師は一人前レベルに到達したものと考えられる。

一方、「一人前レベル」に突入してからは、「何となく、何でも理解して何でも大丈夫だという自信ができてしまって、授業も上手いっていう傲慢さがどことなくあったんだと思います。あとは、タイミング的にパソコンが現場に導入されて、それ

が新鮮で夢中になってしまっていたことに、後々ですが気づかされました」と語り、当時の傲慢な自分を振り返っていた。

具体的には、「女子児童への声かけに失敗したことをきっかけに学級が崩壊した経験」が生じた出来事を語っていた。

「今思えば、本当に恥ずかしい話なんですが、授業中に学級の中心的存在で女子児童達からはアイドル的な位置にいたMさんって子なんですが、3学期2月の校内研修でバスケットボールの研究授業がありました。そのときに、あまりにも適当でダラダラしてたのもあって、思わず『ダラダラするMさんがいるから負けたし、Mさんと同じチームの人は可哀そうだね。明日やっても意味ないね』って体育授業後の放課後に感情的に嫌味を言ってしまった。それまで、個人的には凄くいい学級経営ができていたと思っていたんですが、その翌日からMさんとその取り巻きの6人の女子児童がまったく授業に参加しなくなってしまった、体育だけでなく他の授業でも全く無視、無反応。本当に、2月末からの2週間はどうしようもなくなってしまった職員室でもずっと『どうしたらあの7人が元に戻ってくれるかな』ってことばかり考えてました。そんな3月初旬の卒業式2週間前ですかね、2人の子どもが朝、職員室にきてくれて『何かお手伝いすることありますか?』って聞きにきてくれて、何もないよって返事したら『先生今日も頑張ってね』って言ってくれたんですよね。そのとき、ハッと我に返れたというか、何だか久しぶりに他の子どもたちの顔を見た気がしました。そう言えば、悩んでるときはずっと教室にいても子どもの顔を見てなかつたし、今年1年間はパソコンの画面ばかりみて物事を考えていて、まったく子どもの顔を見てなかつた。7人の反発って突き詰めると、この1年間のつけが爆発したんだって思いました。結局、7人とは関係修復できずに卒業式を迎ってしまいましたが、自信がついて傲慢だった私の鼻っ柱を7人がへし折ってくれて、子ども一人ひとりを見るってことの大切さを教えてもらった1ヵ月でした。」

上述した経験から、「子ども一人ひとりの運動発達や技能レディネスを押さえて観察・判断できない」「一人ひとりに対して育ってほしい姿をイメージできていない」という実践命題を抱えていた。

これより、A教師はティーチングではなくコーチングに关心をもち、アドラー心理学などを中心に「コーチング論」を整理しつつ、子ども一人ひとりを見取るはどういうことを試行錯誤したと語っていた。

具体的には、体育授業のゲームの場には「プレイヤー」「オフィシャル」があり、審判やタイマー係など下支えする役割の方が個性を発揮できる子どもも存在していること、他にも「応援」「実況」などに特化した役割を授業の中で作ってみた結果、子ども達一人ひとりが本当にやりたいという活動や考えて主体的に取り組む姿勢が体育授業の中で見て取れるようになってきたという。一方で、体育は科目である以上、基礎的・基本的な運動技術の習得も重要になってくるため、系統的・段階的に教え込む単元と課題解決的に取り組む単元との使い分けを意識するように年間スケジュールを工夫するように意図した計画を組織化するようになったと語っていた。

「子どもの好きって色々あります。例えばゲームが好きっていうのも、コツコツとレベルを上げるのが好きな子、戦いそのものが好きな子、謎解きや冒険が好きな子、人がやっているのを見るのが好きな子など、本当に同じ好きでも分かれるんですよね。だからこそ、目の前にいるこの子は何が好きなのかを具体的に深く観察するってことがとても重要で、その子の個性を最大限に引き出したり伸ばしたりできる科目ってのが体育科なのかなって思いました。他の科目だと、どうしても個性を尊重した活動ってのが難しいことも多いからこそ、体育科目だけはその自由度が高いとても素晴らしい時間にできる、体育って学級経営とも直結して、とても重要な科目と捉えています。」

態度測定の診断結果をみてみても、3尺度すべての態度スコアがC以上と高く、「この授業はいい授業だと評価する。現に楽しいのでいい授業だろう。体育科という教科の価値は判断できないが、いずれにしてもいい授業だと評価できる」と子どもが授業評価しているものと考えられる。

各項目の得点をみても、「主体的な授業への参加」と関係する「自主的思考と活動」「教師の存在価値（子どもが主体的に活動している授業は、点数が低くなることが経験的に知られている）」という項目の得点から、子ども一人ひとりが主体的に取り

組める体育授業になってきたものと推定できる。

これらより、一人前時代の A 教師は、「女子児童への声かけに失敗して生じた学級崩壊」という出来事をきっかけに、「子ども一人ひとりを見取りつつ、子どもの個性に合わせた授業の場づくりと年間スケジュールの工夫ができる力量形成」に努めることで、中堅レベルへと一皮むけていったものと考えられた。A 教師が有していた「子どもを観察する癖を身につける」という関心の行動目標は、この時代に形成されたものと考えられる。

### 3.2.4. 一人前時代までの失敗経験

中堅レベルとなった A 教師は現在、「教育とは何か」「学校は何をするところなのか」という問い合わせ、「人間にとって本当の豊かさや幸せとは何か」を考えていると語っていた。上記の実践命題を検討することで、「総合学習」「探究学習」「外国語教育」に加えて、「プログラミング教育」「主権者教育」「防災・安全教育」「消費者教育」など、グローバル化や情報化が進む世界を生き抜く力として必要であると考えられた教育内容が問答無用で降り注がれる今の学校現場において、目の前の子ども一人ひとりにとって本当に必要な内容は何かという問い合わせに向き合えるのではないかと語り、日々、「教育原理や哲学に関わった書物」を読み漁りながら過ごしているという。

ところで、中堅レベルとなった A 教師は、初任時代や新人時代の頃に経験したことの中で、学校現場で日々奮闘しているこれらの教師たちも注意した方がいいのではないかということを語っていた。具体的には、「人の話をすべて素直に聞く姿勢が強い教師の場合、最終的に潰れていく同僚を数多くみてきた」と語り、教員研修やメンター制度に関する警鐘を鳴らしていた<sup>(注7)</sup>。

ここでは、上記に関わった語りを記録することで A 教師の失敗経験から熟達化の道程を歩む際の落とし穴を押さえた。

「教師という仕事は、おおよそ 3 年目までは研修や研究授業の機会をもらうことがあるので、色々な人から色々な声や意見を頂戴することができます。言い換えれば、3 年目までがまずは勝負だと思っていいと思いますが、いずれにしても、色々な経験を持った先生や先輩が色々と語ってきます。ここで若い教師にとって重要なのは、大半の話は受け流しても良いかも知れない

という心構えで聞く姿勢です。なぜなら、それぞれの先生や先輩は好き勝手なことを言います。私が最初に受けた指導の中に、『声の大きい一小さいという使い分けが重要だ。声の大きさに教師の人間性がでますよ』『色々なことを予測して授業すること、そのためには周辺視が重要で中心視だけではダメだよ』といった指導を頂戴しました。正直、『ありがとうございます』と御礼を言いながらも心の中では意味がわからないと混乱したことを覚えています。その意味がわかるようになったのは、本当にここ最近なんですが、つまり、教師にも学ぶ適時性ってのが存在していて、その教師のレベルや位置にあったアドバイスや助言をしないと意味がないってことを指導する側の教師やメンターの人たちは知るべきだと思います。ただ一方で、若手の教師も今の自分自身の課題を明確にしていないと、ズレたアドバイスや助言をまともに受けると混乱して結果的に『自分には無理だ』と諦め潰れてしまうので、お互いが意識を正しく高くもつ必要があると思います」

これより、教師にも学ぶ適時性が存在し、学ぶ準備ができていない状況でその教師の適時性に合わない研修、アドバイスや助言を行うことは逆にマイナスな出来事にも成り得る可能性は十分にあり、熟達化の道程を歩む際のひとつの落とし穴であるものと考えられる。

また、A 教師は次のようにも語っていた。「最初に憧れた先輩教師がいまして、とても豪快で強く、我がままだけどリーダーシップがあるのでなぜかみんなが付いていく。そんな存在の M 先生って方がいたんですが、最初は憧れていたので真似をしますよね。それこそ、食事に誘ってもらったときに好みの飲み物、食べ方の話を聞けばそれをそのまま真似するぐらい、尊敬している先輩です。ただ、学級経営や授業に関して、真似をしても全然うまく行かない。3 年ぐらい続けたんですが本当にダメで、M 先生から『何か勘違いしてるぞ。嫌い、苦手は一生苦手だからな』って言われて。それでハッとしたんですよ。確かに、M 先生の声って低くドスの効いた声なんですが自分の声は男性にしては高い方なので、いい意味で集団を占める声ではない。つまり、声とか雰囲気とかで集団をマネジメントしたり学級経営するタイプではないってのは、

表6. 態度得点を調査した教師7名のコンテキスト

担当学年	性別	経験年数	態度結果 (女児・男児) ※( )内は子どもの数	各態度尺度の診断結果
2年生	女性	1年目	低い(8)・低い(12)	(女子) E, E (男子) E, E (初任レベル)
2年生	男性	2年目	低い(16)・低い(11)	(女子) D, D (男子) E, D (初任レベル)
2年生	男性	6年目	低い(13)・低い(14)	(女子) D, D (男子) E, D (初任レベル)
5年生	女性	3年目	普通(11)・低い(9)	(女子) C, C, C (男子) D, D, E (新人レベル)
5年生	女性	5年目	アンバランス(14)・アンバランス(7)	(女子) D, B, D (男子) E, B, D (新人レベル)
6年生	男性	6年目	低い(19)・アンバランス(13)	(女子) D, D, D (男子) D, B, E (新人レベル)
5年生	男性	5年目	やや低い(12)・やや高い(15)	(女子) D, C, D (男子) B, B, C (新人レベル)

何となく思ってましたがM先生に言われてはつきりしました。人には得意・不得意ってのがあって、不得意はどれだけ頑張っても結局は不得意であり得意になることはない。であれば、自分の得意な武器を磨いた方が絶対にいい。だけど、教員研修とか研究授業って、こうした教師のもつ個性とか特徴、強み・弱みを無視して行われるのが現状なんですよね。これだと若手は伸び悩むと思います。ジェンダーの時代にダメかもしれません、どうしたって指導するのは男性が多い、そんな指導する側が研究授業を行った女性の教師に『声が高すぎると聞き取りにくい』って感じの助言をしている場面があって。男性だからこそできることも必ずあると思いますが、一方で女性だからこそできることも必ずあって、差別ではなく区別が重要で『生まれ持ったものを指摘しても無理では?』って感じる助言でしたよね。何が言いたいかって言えば、アドバイスや助言を行うリーダー的立場の者は目の前の教師の得意・不得意、強み・弱みを理解した上で、その教師にとって必要なことを助言することが重要だと思うし、離職率が高い時代なので、若者が育つ世界を創る義務もあると思います。

これより、熟達化の方向性(理想とする教師像)はひとつに限定されるものではないからこそ、指導する側の教師やメンターの人たちは目の前の教師の個性を理解することに努めることが必要であるものと考えられた。もっと言えば、「いい体育授業」を実践していくために普遍的なものは伝えつつ、一方で特殊性に合わせた助言もできるメンターの存在が重要であるものと考えられた。

### 3.3. 各レベルの教師にみる授業の特徴

中堅レベルのA教師のライフヒストリーを導出し、関心の形成過程と時代毎の授業実践の特徴を押さえてきた。最後に、時代毎の授業実践の特徴がA教師独自のものなのかを検討するため、「初任時代レベル」「新人時代レベル」に該当する教師の態度得点の特徴を押さえた。具体的には、初任時代レベルの体育授業の特徴を小学校2年生担任教師3名の結果より、新人時代レベルのそれを同5・6年生担任教師4名の結果よりそれぞれ押さえた(表6参照)。

表7と表8は、「初任時代レベル」および「新人時代レベル」の教師の態度測定より算出した項目点を示している。

初任時代レベルの教師の結果をみてみると、「体育をする喜び」「運動のそう快さ」「学習の喜び」の3項目、「深い感動」項目、「がんばる習慣」「挑戦する態度」の2項目、さらには「男女意識」「みんなの喜び」の2項目の得点が低い傾向にあった。これらの項目は、「よい体育授業の到達度調査」の高田四原則<sup>[25]</sup>と言われる「せいいっぱいの運動」「ワザや力の伸びの自覚」「新しい発見」「仲間と協力」と関わったものである。

これより、初任時代レベルの教師の体育授業の特徴として、子どもが求めている体育授業像とは真逆、すなわち運動従事量は少なく、新しい発見やワザや力の伸びもなく、仲間と関わる機会も少ない体育授業になっている可能性は推定できた。

次に、新人時代レベルの教師の結果をみてみると、男女共に「評価」尺度の得点は他の2尺度より高い傾向にあること、「よろこび」尺度の「苦しみより喜び」「自主的思考と活動」「価値」尺度の「みんなの活動」「みんなのよろこび」「利己主義の抑制」「永続的な仲間」「主体的人間の育成」の項目点が男女共に0.20点以下と低い傾向にあった。

表 7. 初任時代レベルの教師の体育授業の特徴

尺度	項目	項目点	
		女児	男児
よろこび	1 体育をする喜び	0.74 ± 0.09	0.00 ± 0.14
	2 はりきる気持ち	0.44 ± 0.17	0.15 ± 0.12
	3 運動のそう快さ	0.35 ± 0.13	-0.26 ± 0.09
	4 深い感動	0.56 ± 0.16	-0.48 ± 0.11
	5 がんばる習慣	0.62 ± 0.23	-0.19 ± 0.33
	6 学習の喜び	0.74 ± 0.09	-0.03 ± 0.19
	7 挑戦する態度	0.44 ± 0.17	-0.22 ± 0.39
	8 体育科目の価値	0.53 ± 0.19	-0.56 ± 0.07
	態度スコア	4.41 ± 0.52	-1.50 ± 1.15
評価	9 仲間との協力	0.91 ± 0.03	0.13 ± 0.11
	10 授業のながれ	0.53 ± 0.19	0.09 ± 0.59
	11 体力づくり	0.78 ± 0.10	0.35 ± 0.24
	12 授業の印象	0.62 ± 0.13	0.15 ± 0.36
	13 男女意識	0.67 ± 0.19	0.04 ± 0.41
	14 みんなの喜び	0.67 ± 0.07	-0.06 ± 0.38
	15 体育授業に対する好嫌	0.53 ± 0.19	0.14 ± 0.13
	16 体育授業に対する評価	-0.04 ± 0.69	-0.07 ± 0.15
	態度スコア	4.74 ± 1.67	0.79 ± 1.98

これより、新人時代の教師の体育授業の特徴として、運動技能の高い子どもや体育が得意な子どもを中心とした授業展開になっており、そのことに対してそれ以外の子どもの多くが「彼らの自分勝手な振る舞いの行動」に不満を持っていること、全体的に多くの子どもが主体的に取り組めない体育授業になっている可能性が推定できた。

上述した「新人時代」の教師にみる体育授業の特徴は、今回調査対象としたA教師の体育授業の特徴とも類似したものであった。また、「初任時代」の教師にみる「せいいっぱいの運動」「仲間との協力」の不十分さという特徴については、当時のA教師も認識していた内容であった。

これらより、今回導出したA教師のライフヒストリーの特徴は他の教師とも共有できるものであり、時代毎で乗り超えなければならない実践命題になるものと考えられる。

#### 4.まとめ

本研究の目的は、恒常に学習成果を高めることができる中堅レベルの教師を対象に、ナラティブ・インタビュー法を用いて教師生活の中でどのように「関心」を形成してきたのか調査し、恒常に態度得点を高めることができる教師への熟達化のひとつの道程を構造化することで、優れた教師と同じ関心を形成することの実現可能性を探ることとした。

表 8. 新人時代レベルの教師の体育授業の特徴

尺度	項目	項目点	
		女児	男児
よろこび	1 こころよい興奮	0.43 ± 0.08	0.47 ± 0.14
	2 心身の興奮をほぐす	0.33 ± 0.07	0.46 ± 0.09
	3 生活のうるおい	0.28 ± 0.05	0.30 ± 0.15
	4 苦しみより喜び	0.00 ± 0.15	-0.38 ± 0.31
	5 集団生活の楽しみ	0.51 ± 0.11	0.62 ± 0.11
	6 友だちを作る場	0.44 ± 0.08	0.47 ± 0.24
	7 積極的活動意欲	0.42 ± 0.10	0.23 ± 0.28
	8 自主的思考と活動	0.09 ± 0.30	0.27 ± 0.30
	9 体育科目の価値	0.33 ± 0.07	0.33 ± 0.05
評価	10 授業時間数	0.62 ± 0.12	0.62 ± 0.22
	態度スコア	3.45 ± 0.58	3.38 ± 1.72
	11 キビキビした動き	0.63 ± 0.19	0.59 ± 0.17
	12 体力つくり	0.46 ± 0.11	0.57 ± 0.10
	13 明朗活発な性格	0.33 ± 0.09	0.40 ± 0.06
	14 精神力の養成	0.48 ± 0.10	0.66 ± 0.07
	15 堂々がんばる習慣	0.58 ± 0.19	0.49 ± 0.13
	16 協力の習慣	0.56 ± 0.20	0.67 ± 0.07
	17 基本的理論の学習	0.53 ± 0.23	0.61 ± 0.27
価値	18 深い感動	0.25 ± 0.37	0.14 ± 0.45
	19 授業のまとまり	0.45 ± 0.19	0.51 ± 0.41
	20 授業の印象	0.47 ± 0.27	0.37 ± 0.25
	態度スコア	4.74 ± 1.01	5.00 ± 1.51
	21 チームワークの発展	0.27 ± 0.08	0.30 ± 0.12
	22 みんなの活動	0.10 ± 0.20	0.10 ± 0.06
	23 みんなのよろこび	-0.17 ± 0.06	-0.24 ± 0.29
	24 利己主義の抑制	-0.31 ± 0.09	-0.25 ± 0.36
	25 永続的な仲間	0.10 ± 0.25	0.08 ± 0.42
態度スコア	26 主体的人間の育成	0.17 ± 0.13	0.16 ± 0.18
	27 理論と実践の統一	0.54 ± 0.12	0.36 ± 0.41
	28 授業のねらい	0.73 ± 0.18	0.24 ± 0.24
	29 教師の存在価値	0.26 ± 0.15	0.26 ± 0.11
	30 体育科目の必要性	0.53 ± 0.21	0.41 ± 0.15

中堅レベルのA教師のライフヒストリーを導出した結果、(1)「身体を自由自在にコントロールできる身体技能の獲得と子どもが楽しいと言ってくれる体育授業」を中核に、「体育科教育学分野の科学知を知る」をはじめとする4つを関心の具体的な行動目標として形成していたこと、(2)初任時代は「マネジメントを少なくし、運動従事量が多くなるための場づくりの工夫できる力量形成」の努力を積み重ねていたこと、(3)新人時代は「動作学や解剖学などの知識から言語的相互作用を実践できる力量形成」の努力を積み重ねていたこと、(4)一人前時代は「子ども一人ひとりを看取りつつ、子どもの個性に合わせた授業の場づくりと年間スケジュールの工夫ができる力量形成」の努力

を積み重ねていたこと、(5) A教師の成長過程と4つの関心の形成とが対応していたこと、が認められた。

上記(2)(3)(4)より、A教師がそれぞれの時代で努力を積み重ねてきた行為は特殊な才能や経験ではなく、誰もが再現可能な内容であるものと考えられる一方、きっかけとなった失敗経験の内容は「トーケン同一性としての出来事」<sup>[6]</sup>であった。これより、導出した道程を踏まえる場合、教師個人の自然発生的な努力を待つのではなくメンターなどの介入も重要なものと考えられた。

このとき、教師に学ぶ準備ができていない状況でその教師の適時性に合わない研修や目の前の教師の個性と合わない助言などは熟達化の道程の落とし穴となり逆にマイナスな出来事にもなり得る可能性も示唆された。また、A教師が「初任時代」「新人時代」に抱えていた実践命題は他の教師の体育授業に伺うこともできた。

以上のことから、上述した道程を踏まえながらA教師が積み重ねた努力の内容を真似すれば、優れた教師と同じ関心を形成することを実現できる可能性はあるものと考えられた。

今後、A教師以外にも多くの優れた教師のライフヒストリーを導出しながら、恒常に態度得点を高めることができる教師への熟達化過程を検討していく必要はある。同時に、初任教師や若手教師が上記の道程を歩むことで、中堅レベル以上の教師へと成長可能なのかについて介入・検証していくことも必要である。

## 脚注

1) 教師の成長と熟達化は、例えば1から2年目を初任期、3年目以降を中堅期、10年目以降を熟達期と捉える<sup>[26][27]</sup>など、物理的な経験年数の長さで捉えてきたものが存在し、教育現場とは乖離した議論となっていた。つまり、現実的には経験年数の長さと熟達化とは比例する関係ではなく、若手の教師でも優れた授業を実践できる者も存在すれば、逆に経験年数は長いが授業実践は未熟な者も残念ながら存在することは経験的に知られている。また、発達心理学分野で認められる熟達化5段階モデルをみてみると、一人前レベルは「定型処理の範囲に限って、一人でできる段階」と定義されている。仮にこれが真である場合、教師は1年目から一人前段階と捉えることも可能となるため、そ

のまま現場に置き換えることには疑義があった。

2) ナラティブ・インタビューとは、研究者や調査者が用意したインタビューガイドを用いた「質問一回答」形式のインタビュー調査とは異なり、調査協力者自らが経験の中から語るべき内容を選び、一貫した展開の中でそれらを語っていく調査法である<sup>[21]</sup>。授業分析におけるナラティブ・インタビューの意義について石田<sup>[17]</sup>は、ナラティブ・データの分析によって導き出された知見が、ローカルな実践をインターローカルな実践への展開を促す可能性があったことを報告し、研究協力者の意味世界そのままに迫ろうとする研究方法であると語っている。

3) ライフストーリーは人生物語や生活物語などと訳され、個人の人生、生活、生などについて語った口承の語りを指す。ライフヒストリー研究においては、その一次資料として位置づけられている。例えば、ライフヒストリー研究の先駆者である中野<sup>[15]</sup>は、ライフストーリーとは「本人が自己の現実の人生を想起し述べている」ものであり、このようなライフストーリーを「本人の内面から見た現実の主体性把握を重視しつつ、研究者が近現代の社会史と照合し位置づけ、註記を添え」て「仕上げ」たものがライフヒストリーであると述べている。また、浅野<sup>[16]</sup>も、「『語り』を研究者が歴史的・社会的文脈に位置づけて再構成し、個人の自己形成過程を社会変動に即して解釈的に描き出した『作品』がライフヒストリー」であり、「再構成される前の個人の『語り』そのもの」はライフストーリーであると説明している。

4) A教師を調査対象にした理由として、次の4つがある。すなわち、先行研究<sup>[10]</sup>より(1) A教師の体育授業における「出来事の予兆」への気づきと「推論一対処」が関心から生じている可能性が認められたこと、(2) 上記(1)の関心は、定数のような生まれ持った才能ではなく努力によって形成してきたものである様子が認められたこと、(3) A教師から「授業の基礎を知ること」→「教材研究を深めること」→「子ども一人ひとりにあったコーチングの展開ができる」という道程が浮上し、予備データもあったこと、を理由として挙げることはできる。加えて、(4) 過去に実施していた態度測定法の結果をデータ化し有していたことから、科学知を担保しつつ研究協力者の意味世界そのままに迫れる対象者として妥当であると判断

できたことも、理由として挙げられる。

5) 本論文は、先行研究<sup>[10]</sup>で得られた研究成果の一部を使用している。ただし、先行研究では関心と「出来事の予兆」への気づきとの関係を検討することに主たる目的があり、「関心の形成過程」を十分には調査できていなかったこと、「各時代の授業実践の特徴と関心との関係性」を押さえてこなかったため、「客観的ではない」という質的研究法の批判<sup>[21]</sup>に十分に耐えられる検討はできていなかった。

6) 態度測定法の一連の研究より、子どもはまず、「この授業はいい授業かーそうではないか」を「楽しいかー楽しくないか」などでみていること、楽しいと感じたら「この授業はいい授業だ」と再評価すること、その後、「この授業・科目は価値があるかーないか」を決定していることが認められている。また、「楽しいかー楽しくないか」という感じ方と「この授業・科目は価値があるかーないか」という価値決定はまったく関係しないということも報告されている<sup>[13]</sup>。

7) 今回、A教師からは確証はないけれど感じていることがあるということで、次のような語りもあった。すなわち、「教師教育研究がこれだけ多く報告されているのに、実際の学校現場は授業を語れる先輩教師や管理職が明らかに減ってきています。パワーハラなどを恐れて語る場や機会が減ったのかもしれない。結果、若手の学級が崩壊し、それを陰で笑う教師も残念ながらいる。自分勝手な学校現場が増えてきたのではないだろうか。」という語りである。このことは、教師としての人格陶冶性が停滞し、専門職性との結合<sup>[28]</sup>が崩壊し始めていることを予見させる語りである。この語りは、教師教育研究分野は単に学習指導要領に示された内容を合理的に子どもに下すだけの教師育成ではなく、優れた授業実践を創造する教師育成に向けた研究の蓄積が必要であることを切に訴えているものと考える。

## 参考文献

- [1]坂本篤史. 現職教師は授業経験から如何に学ぶか. 教育心理学研究, 2007, 55(4), p.584-556.
- [2]Armour, K. Physical education teachers as career long learners : A compelling research agenda. Physical education and sports pedagogy, 2006, 11, p.203-207.
- [3]木原成一郎. 専門職としての教師の成長過程と支援体制. 日本体育科教育学会編, 体育科教育学の現在. 創文企画, 2011, p.193-207.
- [4]Dreyfus, H. L. & Dreyfus, S. E. 棕田直子訳. 純粹人工知能批判—コンピュータは思考を獲得できるか—. アスキー出版局, 1987.
- [5]田代智紀・會田宏. ハンドボール指導者の熟達化に関する事例研究—新たなチームを立ち上げ全国大会常連校に育てた若手指導者の語りを手がかりに—. ハンドボールリサーチ, 2014, 3, p.9-16.
- [6]厚東芳樹・梅野圭史・上原禎弘・辻延浩. 小学校体育授業における教師の授業中の「出来事」に対する気づきに関する研究—熟練度の相違を中心として—. 教育実践学論集, 2004, 5, p.99-110.
- [7]厚東芳樹・宗野文俊. 小学校体育授業における教師の授業中の「出来事への気づき」に関する研究—学習成果（ゲームパフォーマンス）の相違に着目して—. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 2010, 110, p.49-64.
- [8]厚東芳樹・金須一昂・島崎百恵. 体育科模擬授業における大学生の「出来事の予兆」への気づきの検討. 北海道体育学研究, 2016, 51, p.51-61.
- [9]厚東芳樹・金須一昂. 体育授業における教師の「出来事の予兆」への気づきに関する研究—低学年担任教師を対象として—. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 2017, 123, p.122-141.
- [10]厚東芳樹. 教師のもつ関心と体育授業における「出来事の予兆」への気づきとの関係—教職経験年数15年目中堅レベルの教師の事例—. 人間生活文化研究, 2025, 35, p.466-477.
- [11]梅野圭史・厚東芳樹. 授業研究の評価とその後の生かし方. 体育科教育, 2004, 52(6), p.30-33.
- [12]梅野圭史・辻野昭. 体育科の授業に対する態度尺度の試み—小学校低学年児童について—. 体育学研究, 1980, 25(2), p.139-148.
- [13]厚東芳樹. 気づく技術と関心. 青山社, 2022, p.93-97.
- [14]小田博志. ドイツ語圏における質的健康研究の現状. 日本保健医療行動科学会年報, 1999, p.223-239.
- [15]中野卓. 歴史的現実の再構成個人史と社会史. ライフヒストリーの社会学. 弘文堂, 1995, p.192.
- [16]浅野信彦. 教師教育研究におけるライフストーリー分析の視点—学校の組織的文脈に焦点をあてて—. 文教大学教育学部紀要, 2004, 38, p.83-93.
- [17]石田喜美. 第5節国語科授業分析の方法と研究の実際(3)—教師役の大学生に対するナラティ

- ブ・インタビューー. 全国大学国語教育学会・公開講座ブックレット, 2011, 1, p.31-41.
- [18]楠本繁生・田代智紀・會田宏. ハンドボールにおける卓越した指導者の指導力の熟達化に関する事例研究—高校・大学において全国大会で17回優勝している監督の語りを手がかりに—. ハンドボールリサーチ, 2015, 4, p.11-19.
- [19]金子聖子. 日本人の留学先としてのマレーシア. グローバル人材育成教育研究, 2021, 9(1), p.1-11.
- [20]佐藤美奈子. 地方農村地域における成人識字教育と女性の言語社会化—ブータン王国におけるノンフォーマル教育調査から—. 社会言語科学, 2021, 24(1), p.157-172.
- [21]ウヴェ・フリック. 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳. 質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論—. 春秋社, 2002, p.93-167.
- [22]Cortazzi, M. Narrative analysis. London: Falmer Press, 1993.
- [23]笠井恵美. サービス・プロフェッショナル—営業, 販売, 接客「上位2割」の熟達者になる14の経験—. プレジデント社, 2009.
- [24]厚東芳樹. プロフェッショナルな教師の体育授業をみる観点は何が違うのか. ブイツーソリューション, 2014.
- [25]小林篤. 阪田尚彦他編. 学校体育授業辞典. 大修館書店, 1995, p.725-728.
- [26]Kagan, D.M. Professional growth among preservice and beginning teachers. Review of educational research, 1992, 62, p.233-243.
- [27]大家まゆみ. 教師の成長と熟達化—大学生のキャリア選択と教師のワーク・ライフ・バランス—. 教職・学芸員過程研究, 2022, 3, p.15-22.
- [28]秋山裕右・梅野圭史. 体育授業における「出来事」の教育学的意義に関する—考察—デイヴィッドソンの「出来事」論を考察視座として—. 体育・スポーツ哲学研究, 2001, 23(2), p.27-41.

(受付日: 2025年11月23日, 受理日: 2025年12月22日)

## 厚東 芳樹 (こうとう よしき)

現職: 大妻女子大学家政学部児童学科准教授

### プロフィール:

兵庫教育大学連合大学院後期課程修了. 博士 (学校教育学).

専門は身体教育学と体育科教育学. これまで, 実践者にはレベルが存在し, 単なる経験年数の長さとレベルの高さは比例関係がないため, 各レベルに合わせたメンターの関わりや教師教育が必要であるという仮説の下, 実践レベルに合わせた体育授業における教師の「出来事の予兆」への気づきとその「推論-対処」のあり方に焦点をあてた研究を行ってきている. 合わせて, 「運動を知る教師 (教材研究の深い教師)」も優れた授業を実践するための十分条件であると考え, 「いい動作」と「マズい動作」「間違った動作」「怪我につながる危ない動作」との違いを整理する研究やスポーツの文化的・歴史的発展過程に学んでいくことなどに関わった研究にも取り組んでいる. なお, 現在は小学校や保育園のフィールドを中心に週4日入り込みながら調査を進めるエスノグラフィの手法を用いた研究活動に取り組んでいる.

### 主な著書:

気づく技術と関心 (単著, 青山社)